3倍速ドッペルゲンガー

久米絵美里

絵 森川泉

Alicekan

もくじ

第1話 ▷ ドッペル再生社会 007

第2話 ▷ ドウキ紹介 017

第3話 ▷ 投稿と熟考 027

第4話 ▷ 第一脱落者の憂鬱(ゆううつ) 038

第5話 ▷ 家系(いえけい)企画 045

第6話 ▷ KTK講演会 052

第7話 ▷ 矢野超大作上映会 073

第8話 ▷ 名探偵☆めいちゃん 091

第9話 ▷ 腹に一物(いちもつ)さらに密約 103

第10話 ▷ 草むしり無視無理め 118

第11話 ▷ 黒幕たちの舞台裏 141

第12話 ▷ 未来がくれんぼ 190

▽3倍速『3倍速ドッペルゲンガー』あらすじ 196

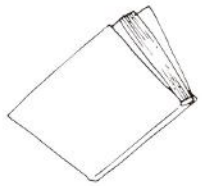
▽考察!?『3倍速ドッペルゲンガー』文：考察ありす 208

Alicekan

あのことだけは、知られたくない。

どうしても、絶対に。

Alicekan



第1話 ▼ドッペル再生社会

「なー、今日の小テスト、何点予定？」
「んあ？　あー、7割」
「まじかー。7割あれば余裕だよなー」
その日。荻原明人は、クラスの隣人たちが唐突にはじめたその会話を、ひとり、自分の席にすわったまま、ぼんやりと聞き流していた。
すると、明人の最寄りの席の彼が、頭をかかえて机につっぷす。
「やー、俺さー、今日のテストの存在、めっちゃ忘れててさー、昨日、寝る前に思い出してドッペル再生したら、まー、びっくり、3割も埋められてなくて。でもほら俺、中間も赤点ギリだったから、今日5割取っとかないと、期末に向けてだいぶ追いつめ

Alicekan

られんじゃん？　一応、再生中に追い勉したけど、まじで手応えゼロすぎて、こわくて再ドッペルできんかったわ。あー、一夜づけの神さま、どうか俺に力をお与えください……」

と、そのまま謎の神に向かって祈りはじめた隣人を、明人は横目でちらりと見やる。

彼の言うとおり、今日は朝から漢字テストがある。小テストと言いつつその範囲は広く、成績表への影響も大きい。中学の時よりも、成績による留年問題が厳しくなった高校一年生の今、中間テストの成績が芳しくなかった彼にとって、今日のテストは決して、軽視できないはずのものだった。にもかかわらず、それを忘れていた彼の迂闊さに、ツッコミどころは大いにあったが、彼はそこから起死回生をかけ、一応の努力を試みている。となれば、神さまもそんな彼に、満面の笑みとまではいかずとも、軽いほほえみくらいはなげかけてもよいのではないか。と、明人は他人事ながら、そこはかとなく彼の幸せを願った。

ドッペル再生。

世の中、便利になったものだと、明人はそこで改めて、そのワードをかみしめる。

それは、明人たちが生まれる少し前に開発された技術で、専用のアプリを使い、スマホなどで自撮りをするように自分をスキャンすると、脳細胞もふくめた「その瞬間の自分」が原子レベルまでデータ化され、アプリに登録される。そのデータの正確さたるや、スキャンした対象の体調や思考までをも端末上で再現可能なほどで、それゆえにその分身データは、開発者の使用言語であるドイツ語で「二重の人」を意味する、「ドッペルゲンガー」という名で呼ばれている。

そして、その分身データは、インターネットを通じて瞬時にほかの人間や社会情勢などの情報と組み合わされ、アプリ上に精巧なパラレルワールドを構築。利用者はそのデータを、動画というかたちで、最高3倍速で視聴することができる。つまり、この通称「ドッペル再生」と呼ばれる機能によって人々は、いつでも誰でも天気予報感覚で、自分の「統計学上最も可能性が高い未来」を、気軽に予測できるようになったのだ。

たとえば、先ほどの明人の最寄りの席の彼を例にあげると、おそらく彼は、昨夜十時頃にテストの存在を思い出し、ひとまず何も勉強をしていない状態の自分をスキャン。そこから3倍速視聴でドッペル再生を開始し、約十時間後のテスト風景を夜中の一時過ぎに知った。ただ、そのドッペル再生中の三時間強の間に彼は、「追い勉」、す

Alcekan

なわち「追加の勉強」をしたため、それによって、実際のこれからのテストの結果は変わってくる可能性が高い。しかし彼はその後、勉強後の自分を再びスキャンし、もう一度ドッペル再生をすることはしなかったらしく、今、彼の未来はまさに、「神のみぞ知る」状態だ。

と、彼の結果はともかく、このように今や世間では、テストでもなんでも、事前にドッペル再生で結果を予測しておくことが常識となっている。

ただ、このドッペル再生によって表示される範囲は、分身データの「視界」に限られ、一度に再生できるデータは、ひとりひとつまで。また、システムの都合上、ドッペル再生内で自分が視聴しているドッペル動画は表示されず、そしてもちろん、全世界の人間が、常に最新の自分の情報を登録しているわけではないため、予測がはずれることもある。しかし、仮に教師がテスト問題作成後に、自分のデータをドッペルアプリにアップデートしなかったとしても、アプリは、教師が最後に登録したデータから、教師がつくりそうな問題を予測し、それに基づいて生徒たちの成績予測をはじき出す。そのため、実際のテスト問題が、ドッペル再生の予測から変わったとしても、何割点数が取れるかという部分の予測が大きくはずれることはあまりなかった。

ただ、先ほどの彼のように、追い勉によって未来を改善することは可能であり、その結果、分身世界と現実世界のデータに違いが生じて、ほかの人間の未来も多少変わることは多々ある。しかし、このようないくつかの難点を差し引いても、「だいたいの未来を、いつでも気軽に予測できる」というドッペル再生の機能は誰の目にも魅力的にうつり、今や世界中のほとんどの人々が、なにかにつけてドッペル再生をおこなっていた。そして、その利用者数と利用頻度の高さが、データの精度をさらに上げ、ドッペル再生の未来予測は、今、日に日に正確性を増していっている。

そんな世の中で、彼の追い勉は、未来をどれほど変えることができるのか。盗み聞きの身分ながら、明人はその結果が気になったが、そこで急に、ふっ、と明人のすわっていた席の前に影が落ち、明人の意識はそちらに引っぱられた。

するとそこにはあろうことか、クラス一のインフルエンサー、河野有空が立っていて、ただでさえぼうっとしていた中、普段まったく関わりのない有空が、急に目の前に現れて、明人は面食らう。

しかし、有空は明人のそんな反応をものともせず、明人の机に手をつくと、軽く体をかたむけながら、明人をまっすぐに見て、言った。

AiCeka

「ねえ、明人くん。ドッキン、しない？」
有空の言葉を受けて、明人はかたまる。
いや、正確には、
「ど、っきん？」
と、これまで一度も話したことのないそのクラスメートが発した謎の言葉の音を、まぬけになぞることだけはした。
すると有空は、小さな白いこぶしを自身の桜色の唇に当てて、くすくすと笑う。細くて長い黒髪が、それに合わせてかすかにふるえた。
「そー。ドッペル再生禁止、略してドッ禁！　夏休みに、一緒にいかが？」
やたらと楽しそうな有空に対し、明人はぎょっとする。
「えーっと？　なんで、俺？」
すると、有空はまた笑った。
「ふふっ、だよね。ごめん、突然。実は、言い出したの矢野っちなんだけど、せっかくなら、クラスのいろんなタイプの人と、企画っぽくしたいねーって話になって。何人か集めて、誰がいちばん長くドッ禁できるか競ったら楽しそうってなったの。で、

明人くん、なんか雰囲気、いい感じだから、突撃お誘いしちゃいました」
そう言って有空はまた、自身がまとっている元素をすべて味方につけるかのように、かろやかに笑って空気をゆらす。この、すみずみまで計算しつくされているようで自然な有空の笑顔は、きっと老若男女を魅了してやまないのだろう。
と、頭の端では感じながら、明人のメイン思考は、ちがうとっかかりに手をつける。
「矢野、解か」
納得するように明人が確認したその名前の主は、クラスのムードメーカー男子。制服を適度に着くずし、髪色も明るい彼の身長は、平均には少し届かず、顔も特別整っているわけではない。しかし、彼からはじけ出ているその華やかな雰囲気は、彼の定位置を、常にクラスの明るい場所に固定していた。とはいえ、リーダーシップやカリスマ性という言葉よりは、お調子者という肩書きの方がよく似合う彼は、教師やクラスの面々から、その騒々しさを本気でたしなめられることも少なくない。つまり、矢野解という人物は、ことなかれ主義の明人には、あまり接点のない人物だった。
有空とてそうだ。有空は入学当初から、爪の先までさわやかで、その完成度たるや、世界は常に彼女に清風を向けるように仕組まれているのではないかと勘ぐってしまう

Alicekan

ほど。派手なメイクや凝った髪型を駆使しているわけでもないにもかかわらず、有空はいつも、きらきらと輝いていて、笑顔を絶やさず、分けへだてなく人に接する性格は、万人に愛されている。スカート丈もほどほどで教師受けもよい一方で、成績は目立つ方ではなく、日常生活の言動もほどよくぬけていて嫌味がない。ゆえに、学級委員ではないものの、有空の鶴の一声で、クラスの風向きが変わることは多々あった。そんな有空だからか、ＳＮＳのフォロワー数は、世間一般から見てもかなり多い方らしく、ただ、そのＳＮＳにほぼ関与していない明人にとっては、有空もまた、接点のない人間だった。

それで明人は、かしげた首の先に、さらに疑問をつなげる。

「ほかに、誰に声、かけてんの？」

「えっとね、琴子ちゃんと、六反田くん！　ふたりとも、もうＯＫもらってて、まあ、五人くらいがいいかなってことで、明人くんがＯＫだったら、募集終わり！　どうです、旦那、最後のひと枠ですぜ？」

「意外。ふたりとも、あんまそういうの乗ってこなそうなのに」

「ところがどっこい、ふたりとも勉強になりそうって、めっちゃ乗り気」

「それは、めっちゃところがどっこいだね」

有空の言葉をなぞりながら、明人は新たに登場したふたつの名前を、頭の中で実像に結びつける。

鮫島琴子。毛量の多い黒髪をボリュームのある三つ編みおさげにし、縁のある丸眼鏡をかけている彼女は、一見、学級委員タイプのようだが、意外にとんがった性格をしていて、うとまれることが多い。異様な読書家らしく、古今東西の雑学に通じているがゆえに、主に文系の授業で、時に急に手をあげ、教師のミスを指摘したり、教師の主張を跳ねかえそうと早口で論破したりする。

六反田尚弥。逆に彼ほど見た目と中身のギャップが小さい人物はいない。細身の長身に、手入れのしやすそうな黒い短髪。オシャレよりも実用性にふりきった眼鏡をかけた彼は口数の少ない合理主義者で、答えがすっきりと出やすい数学などの理系科目を、クイズ感覚で楽しむことができるタイプらしい。

つまり、ふたりとも眼鏡はかけているものの、性格は大いに異なる。

そして、ちなみに明人は眼鏡をかけていない。

だから明人は、言った。

AiCekan

「すごい。みごとな人選だね」
「でしょー。キャラかぶりゼロ！　でもだからこそ、我々には明人様が必要なのです。明人様あってこその、完全体です。だから、ね！　お願い！」
と、有空が顔の前で両手を合わせて、明人に大げさに頼みこむ。クラスきってのインフルエンサーに立ったまま頭を下げられて、すわったままの明人はひどく居心地が悪かった。
だから、「ダメ？」と、有空が眉の端を下げると、明人は言った。
「いや、いいよ。やる」

第2話 ▼ドウキ紹介

「えー、皆様、本日はお足元の悪い中、お集まりくださり、誠にありがとうございます。わたくし、本日司会を務めさせていただきます、矢野、解。矢野解でございます」
七月の期末テストも終わり、あとは夏休みを待つばかりとなったある日の放課後。有空が先日、明人に持ちかけたドッ禁ゲームの参加者五人が、空き教室に集った。
発起人は矢野で、招集の声は、有空が事前に作成したグループトークでかけられた。そして、この企画の言い出しっぺであるという矢野は、当然、今日も司会役を買って出て、教壇の上でいつもの調子で弁をふるっている。ただいつもとちがい、矢野の視線と言葉は、教室に集まった面々にではなく、手の中のスマホに向けられていた。
有空は、そんな矢野の目の前の席にすわり、にこにこと笑って矢野を見上げている。

Alicekan